



●サンヨー・インタビュアー 144

話す人 岡本太郎氏 (画家)

聞く人 当社 松岡専務取締役

日本はもっと明るかった

松岡専務取締役 このあいだ週刊誌でちょっと拝見しましたが、今、メキシコで大壁画を制作しておられるそうですね。

岡本太郎氏 ええ、大仕事なんです。四十六階建てで二千室もあるという中南米一のホテルのメインロビーの壁画で、高さ六メートル、幅が三十数メートルもあるんです。

松岡 ほう、大きいですね。

岡本 これをメキシコのオリンピックがはじまるまでに描かなきゃならない。

松岡 オリンピックってもうじきでしょう。どの程度までできているんです。

岡本 いや、下絵しかできていない。それを向こうの絵かきに一応拡大させて、僕が仕上げをする。まあ、仕上げにどうしても二カ月はかかりますかね。だからこの夏も向こうへ行かなきゃならないんです。それに大きなモニュメントの仕事もありますし。

松岡 たいへんですなあ……。メキシコという国は、ポンチョっていうんですか、あんなコスチュームにしても色調が相当原色的ですね。ところがこのごろは日本でも、着るものから印刷物から、だんだん原色を使ったものがふえてきました。これはもう、戦前はとも考えられなかったことです。

岡本 そうですね。世界的な傾向です。ヨーロッパ、アメリカでもこの数年来、原色ばかりですからね。そうすると、日本もそれにくっついて原色を使わざるを得なくなってきたわけです。

松岡 何が原因で、欧米にも日本にも原色がふえてきたんでしょうか。

岡本 行きづまったからですよ。西欧文化の行きづまりが、こういう傾向を生み出した。西欧文化はパリからニューヨーク、ロンドンと中心が移ってききましたけど、アメリカのベトナム戦争やドル危機で象徴されるように、もう全体が行きづまっています。このときにこそ、異質の文化をもっているわれわれ日本人が発言し、西欧の先頭に立って創造していかなくちゃいけないのに、相変わらず西欧一辺倒の日本のインテリ、政治家ばかりですね。

松岡 このごろはアングラ時代といって、既成の概念を破った歌、芝居、絵などが氾濫しておりますが、これも何かそういう行きづまりの表われかもしれませんね。

岡本 アングラっていうのは、やはり必然性があるわけなんです。今の、現代の味気なさね、それに対してこの地面の底にはいつて、そこで人間本来の欲望とか夢とかってものを満たしたいっていう気持、非常によくわかります。つまり現代社会のいちばん不満な、充足されていない面をそこで爆発させているわけです。

松岡 なるほど、わかるような気がします。

岡本 特に、これからの可能性を持っている若者にとっては、現代ってものはますますやりきれない。大人にしても、毎日毎日動めているだけで、何ら自分がほんとに生きたい生き方をしていないけれど、大人はみんな自分をごまかしている。それができない若者がアングラっていう形で、自分を爆発させているんですよ。

松岡 それだけ純粋なわけですね。

岡本 そういうことです。

松岡 話もどりますけど、この原色というものは、簡単なようで、これほどむずかしいものはありませんね。これが中間色だと、ごまかすというとおかしいけど、こうすつと入れてもわりと自然な感じで見られますが……。

岡本 だから原色を使う人は、その人自体がスパッと原色のように無邪気であり、明朗でなければならぬ。けちくさい人間は原色は使えないですよ。

松岡 思いきったことのできる人ですね、原色を使えるのは。

岡本 これまでの日本人というのは、原色を使う勇気がなかった。だから、僕は原色を使うから、日本では嫌われているんですよ。日本人よりもメキシコ人だったほうがいいぐらい、メキシコでは理解されていると言われています。

松岡 先生の作品がメキシコ人の気質にピッタリするんでしょうか。

岡本 メキシコと日本というのは、大昔、何か関係があったんじゃないかと思えます。日本の縄文土器、中国の殷の時代の土器、それからメキシコで発掘された土器がピシヤリとつながっているわけですよ。それから最近、ブラジルのアマゾン河の河口で発掘されたものが、縄文土器とそっくりなんです。

松岡 ほう、何か交流があったかもしれないというわけですね。

岡本 だから日本人だって、本来はメキシコ的なものを持っていたと言えるんですよ。

松岡 われわれ、日本的な本来の美しさと

いうと、どうしても「わび」「さび」と考えますか……。

岡本 そりゃインチキですよ。「わび」「さび」の言葉ができた時分は、「わび」「さび」の最も典型的な形を何と言ったかという田舎家に名馬をつないだ姿だと言う。今ふうに解釈すれば、ロールスロイスか、すごいスポーツカーのような高級の車を、いわば一杯飲み屋かどこかの前に止めているっていうことですよ。日本じゃもう、とても困ると思うような取り合わせ、これは非常な皮肉であり、洒落っ気です。みな今、考えている「わび」とか「さび」っていう感じと全然違うんだなあ。

松岡 なるほどね。

岡本 それほど「わび」「さび」は積極的な要素を持っていた。それをごまかしたのが幕末っていうか、徳川末期ですよ。元禄期まではまだよかったです。徳川末期になると、幕府の財政的な困難から奢



侈禁止令が出されて、本当に明るい、パツと開くようなものを押えちゃった。渋好みとか何とか言うけど、あれは、日本がいちばん停滞した時代のムードが続いているだけなんです。日本ていうのは、もっと明朗で、開けて、もっと無邪気で、豊かな国ですよ。

松岡 そうですか。

岡本 日本には狩猟時代に、縄文土器っていう気の狂うほどすばらしいものがあつた。ところが日本が農耕社会になって、米を作るようになってから、ガタンと人間のエネルギーが落ちるわけです。なぜかっていうと、狩猟の時代には、獲物を射とめようっていうんで、自分からからだをぶっつけ、追いかけて、つかまえるところが農耕社会になると、種をまいてそれが伸びてくれるのをじゅくじゅくと待つ。一年たつてそれを刈り取ると、また次の一年間種をまいて、育つのを待つ。人間が非常に消極的になるし、受け身になる。それがずーっと今日まで一応続いたけれども、日本のほんとの生命力は、縄文土器に見られるように、エネルギーのあふれたすばらしいものなんです。

松岡 このエネルギーというのは、すべての人間が本来持っているはずのものです。

岡本 そうなんです。だけど今では、分際を心得て、上の人の目の色を伺ってちまちまとやっているやつが日本人、てことになってる。あんまりパツと開かないで、地味な格好をし、地味な色を使い、言いたいことも言わない。こんなのが美徳みたいに思っています。これは大ま

ちがいですよ。

松岡 古典に還れというか……。

岡本 古典じゃないんです。古典ていうのはこれはワクにはまったものだし、形式を指すものだから意味ないです。初源に還れですよ。

松岡 初源に還れ……。

岡本 本来の人間に還るわけです。今は自由だと言いながら、少しも自由じゃないですね。社会保障があり、基本的人権が擁護されていると言うけど、ほんとのことが言えない。ほんとのことができない。自分のやりたいことがやれないって言うのが、現代ですよ。原始時代のほうが、もちろんいろんな意味での制約はあるけれども、はるかに人間の根源的な情熱をぶつけることができた。だから今の現代人は古いものに逆に圧倒されるわけです。

松岡 なるほど。

岡本 だから芸術は、逆に、根源の時代にすばらしい表現があつて、だんだんやせ細ってきているんです。とりわけ今の西欧文化っていうのは、いちばん袋小路に來ちゃって、どうにもならない状態になっている。それを打ち開く役割を今、僕がやっているわけです(笑)。

松岡 先生の絵や彫刻、見せていただいたことがあります。こうしてお話を伺うと、その心というふうなもの、わかってくるような気がします。

嫌われながら好かれること

松岡 万博、いよいよあと二年ですな。先



ほど度胸がいらいます。

松岡 そうですね。めちやくちやをやれ、なんて言われると、かえってうるたえてしまいますね(笑)。万博には具体的にどんなものを考えておられるんです。

岡本 細かいプランはもう発表してありますから、言いませんけれど、おもしろいことをいろいろやりますよ。全体として生命の尊厳を感じとらせるつもりです。そうね、たとえば単細胞生物のアミーバね、あれをでっかく作ろうかと考えています。

松岡 ほう、私には思いも及ばないですね。

岡本 アミーバってのは、こう形のあるよくなかないような、丸いようなゆがんだような…… ああいうのが僕は理想ですよ。生命のね。アミーバみたいなものを見ると、ああ、こういうものになりたいなと思う。人間てのは、よけいなことばっかりに振り回されて、自分がほんとに願っていることじゃないことで動かされて、ほんとにつまらない。

松岡 ほんとですね。

岡本 その生命の理想が、はからずも生物のいちばん初源のところにあるんですよ。だからいちばんの初源といちばんの究極は、実はピシッと一致するというのが、僕の考えなんです。

松岡 先ほどおっしゃった、人間の根源の時代にすばらしい芸術があつたということと同じところから出ているわけですね。

岡本 だから、ただ無意味にべらぼうなものを作るのじゃなくて、今、日本で価値があると思われている西欧美や、インチ

キの日本美とは全く違う、人間ののちと根源的な美しさを表わしたいわけです。まあ、ほかにも言いたいことはたくさんありますけど、きょうは朝から万博の公聴会で、そんなことばかりしゃべってききましたので、繰り返すのはつらいから、象徴的にしか言いませんが……。

松岡 いや、おそらく先生はもう、言い飽きておられるだろうと思いましたが、さすがに、やっぱり先生にご登場いただいた以上、万博のことをお伺いしないわけにはいきませんでしよう。

岡本 いや、僕もできるだけ多くの人に会って、万博の話をしたとは思っています。

だから、きょうは東京、けさは大阪でテーマ展示のプランを説明する公聴会をやったわけなんです。みんな、僕の話聞いてはじめて、万博に情熱を感じるらしいんです。

松岡 そうでしょう。私も何か楽しみになってきました。

岡本 だけど、僕は喜ばれるためではなく、むしろ、問題をぶつけたたい、僕の話聞いたり読んだりした人がみんな、けとばされたような気持ちになってほしい。ああいいな、っていうんじや、問題はそれでおしまい。何かコンテクションと思うような気持ちにさせたいわけなんです。

松岡 なるほど。日本人ていうのはだいたいの、事なかれ主義で、当たりさわりのないことを言ってしまうことが多いいですね。

岡本 そうなんです。だけど僕は絶対に譲歩しない。譲歩しないことだけが人間の救いですよ。世間では心を入れかえると

対好かれちゃいけない。嫌われながら好かれるってことが大事なんです。僕はそういう存在ですよ。日本では珍しい存在ですよ(笑)。

現代人は人間か部品か

松岡 機械文明というか物質文明はほとんど発達するけど、精神文化の面では、人間本来の姿というのとはちっとも変わってありませんね。

岡本 進歩していませんね、全然。だから万博のテーマが「進歩と調和」っていうんだけど、いったい人間が進歩しているかどうか、たいへん疑わしいわけですよ。松岡 そうですね。

岡本 今はいかにも知能の時代、知性の時代だと思われているけど、逆にいちばん鈍い、頭の悪い時代なんですよ。今の世ではサラリーマン以外の存在はほとんどないぐらい、人間が自主性を失っている。そして何かポーツとして、車を持ちたいとかいい女房を持ちたいとか、土曜日曜には何とかランドへ行つて弁当を食べようとか、その程度のことしか考えない、それほど愚劣なんですよ。

松岡 いわゆるマイホーム主義というやつですね。

岡本 僕は数年前、パリのシャンゼリゼ、ニュー YORK の五番街を通過してメキシコへ行つたんですよ。そのときに、感激しましたね。メキシコの繁華街をちょっとはざると、みんなはだして、色と

かしているんですよ。

松岡 確かにわれわれは、習性的に妥協してようなところになってますね。

岡本 実際、人間ほど賢く、人間ほど愚かしい存在はない。自分で作ったものに押し込められて、それでどうにもならない。ならば自分の作る以前のものに立ち返ればいいのに、それだけの勇気がないんです。その点でも人間の初源的なものに還りながら、問題を考えることが大事です。

松岡 ほんとに人間は一生に一べんしか生きられないんですからね……

とき 昭和四十三年四月十三日
ところ 京都・木屋町のさる家にて

岡本太郎氏

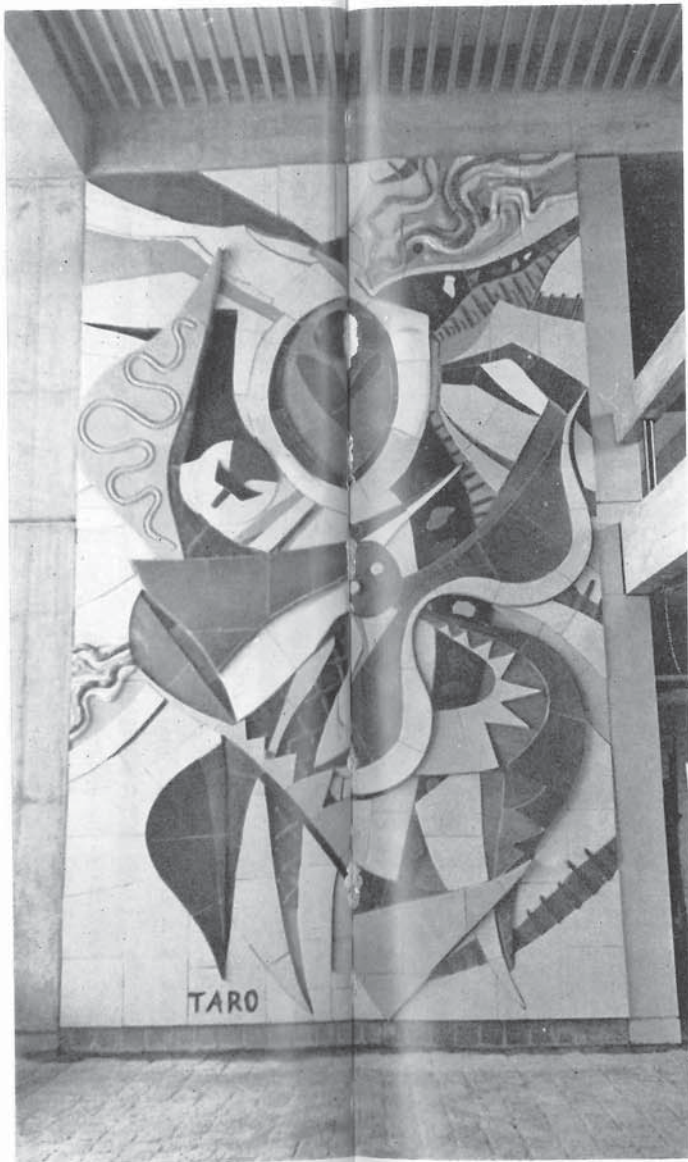
明治四十四年、岡本一平氏・かの子夫人の長男として東京に生まれる。昭和四年、東京美術学校(現東京芸術大学)に入学後まもなく、両親と共に渡仏。絵画を勉強するもたわら、ソルボンヌ大学で哲学、社会学、民族学をおさめる。同十五年帰国以後、絵画、彫刻の分野で前衛美術派を代表する活躍を続けている。
一方、評論活動にも力を入れ、「今日の芸術」「日本の伝統」「日本再発見」「忘れられた日本——沖繩文化論」「原色の呪文」等、多数の著書がある。

松岡 結局は嫌われないんですね、先生は。岡本 メキシコじゃ、もう日本人であることをやめて、メキシコ人になれと、しきりに言われてるんです。だけど、ちょっと待ってこれって言ったんだ。メキシコへ行くと、大芸術家であり、神様みたいにあがめられる、ちっともおもしろくない。日本だとね、僕は絵とか彫刻とかだけじゃなく、教育から宗教から、もういろんな分野で発言してる。だからいろんな人がみんな、僕の足を引っ張るわけですよ。僕は平気な顔してるからわからないだろうけど、みんなずいぶん意地悪する。これが楽しいんでね。メキシコでみんなにあがめられちゃうと、その楽しさがなくなる。だから行きたくないって僕が言ったら、彼らには全然、僕の言う意味がわからない(笑)。

松岡 そりゃそうでしょう(笑い)。
岡本 人間、ほんとに本質的な意味でね、いやみをやるんじゃない、きれいなものを言って、きれいに態度をとって、けちくさいことをしないでフェアにやって、それでも嫌われたらすばらしいですよ。松岡 普通は好かれよう、好かれようとして努力するんですが……

岡本 好かれちゃいけませんよ。好かれるなんてことは、ごまかしてる証拠だ。絶

いうことを美德とするけれども、一たん自分の道を決めた人間が、たとえ一度でも譲歩したらもう救われぬ。だから僕ははじめから、命をかけて譲歩しないですよ。ところが、命はなくならないで、逆にふくらんでいく、不思議にね。
松岡 うらやましい話ですね。われわれのように企業の大きい組織の中にはいってしまつと、自分を貫き通すことはたいへん困難ですな。
岡本 自分でも僕みたいな男は世界にも珍しいと思つてますよ(笑い)。僕はほんとに一つもごまかしたことがないですよ。そのほうが長続きするし、かえつて処世術なんか使つと、いやな気持ちになるだけです。特に芸術家っていうのは嫌われなきゃいけない、っていうのが、僕のいつでも言っていることです。
松岡 好かれちゃいけないんですか。
岡本 好かれることは、もう妥協してることですよ。好かれなければ絵が売れないから、自分から降りて、その時代のムードに合つて、これではだめですよ。僕は絶対に嫌われたくない。だから徹底的に嫌われることを念願していているんだけれども、どういうわけか万博のプロデューサーに選ばれたし、メキシコではベタばれされるし……(笑い)。



東京都庁舎メインホール壁「日の壁」(1956年制作)

りどりの好き勝手ななりをして、ひなたぼっこをしているわけです。そこにはほかに人間的なふくらみと、すばらしい人間像がある。ところが、ニュー YORK の五番街を歩いているやつは、みんな同じような顔をして、同じような格好して、せかせか歩いている。そりゃ、彼らは金もあるでしょう、社会保障もゆき届いているでしょうし、いろんなプライドを持っているかもしれない。それに比べてメキシコのひなたぼっこしている人たちは、学校もろくに行つてないだろうし、金もないだろう。だけど人間としては、ずっとすばらしいですよ。

松岡 まさに、人間という感じがすね。
岡本 人間ですよ。なまなましく人間です。全体的に人間なんです。ところがニュー YORK とかパリ、あるいは東京の銀座、渋谷、新宿、そんなところを歩いている人間を見ると、みんな部品にしか見えな

い。人間社会の部品にしか見えな。松岡 部品ねえ。
岡本 部品ですよ。ご存知のように、現在の経済機構あるいは社会体系の中では、人間全部が部品化されている。だからその中の一つのわずかな部分しか担当してなくてもそれでみな満足しているわけです。それに対して、学歴もないだろうし、

金もないだろうけど、永遠の人間の姿をしているメキシコ人を見たら、うわーいいな、と思っちゃう。そのほうが僕にはずっと近い感じなんです。へたなインテリよりはるかにすばらしい。人間、いかに金とか知識とかを蓄積したってろくなことないですよ。現実に、今アメリカといういちばん繁栄している国が、実はいちばん不幸じゃないですか。
松岡 人間であることを忘れてしまうのですね。
岡本 そういうことを考えると、人間はどうにもならない一つの坂道を地すべりして落ちていってやるような感じがするわけです。だけど地すべりというのでもまた悪くないと思うんで、地すべりしながらも自分というものをちゃんとつかんで人間が、もっともつと世の中にふえてくることによつて救われるんじゃないか。でないよ、人間の将来なんていうのは絶望的ですよ。
松岡 最後にはやっぱり、何と言いますか人間というものの郷愁にめよるような時期が来るんじゃないでしょうか。
岡本 いや、それは時期じゃなくて、しょっちゅうあるんです。ただ、そういうことをはつきりとかかむ人間とつかまないと人間がいるだけの話です。みんなごま